



地域子ども・子育て活動支援助成事業 実施報告書（別紙2）

<p>団体名</p>	<p>おいでおいでルーム</p>
<p>取組の名称</p>	<p>対面で利用できる安全で安心の居場所提供 オンライン子育てサロンおいでルーム普及に努める</p>
<p>実施場所</p>	<p>川崎市中原区下新城2-7-15</p>
<p>対象地域</p>	<p>全区と横浜市 ●コロナ禍の影響か中原・高津区の利用にとどまった。</p>
<p>対象地域の 特色・課題</p>	<p>●小杉エリアからも近く自転車で15分ほどの地域にあり、利用者の範囲は中原区・高津区・幸区のエリアから来ている。身近に迫るコロナ感染は、人の分断・寸断・孤立が表面化し、社会や生活、生きる価値観も変化した。生後間もない乳児から未就園児を抱える母親は不安を抱えながら、人とのつながりを求めていることを一層感じた。</p> <p>●引き続きコロナ禍で親子が集う地域の居場所利用が「オンライン」対応等に切り替えられ、遊び等の提供に限られている。その中おいでルームは、対面で利用できる予約システムを取り入れ(利用枠を4組・生活様式の徹底)辛い母親の気持ちの受け入れ、安心できる居場所の提供を続けている。自宅開放の「おいでルーム」は、利用者さんが「実家に帰ったように思えます」というように、寛いだ中で、母親一人が頑張らないでいい子育て、利用者みんなで子育てができる環境でした。</p> <p>●コロナ感染で対面方式は、どんなに予防してもきれいな現状ではあるが、問題が起きた場合には、適切に対処できるよう、日頃の感染情報収集と発生時の躊躇のない判断力、各区役所との連携プレーで乗り切るほかはない。社会との接点を求める親子が、安心安全に利用できる居場所の提供は、緊張の連続であるが当たり前の日常生活に戻る日を目指した。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>

取組の趣旨・目的

- コロナ禍前は、第二子の出産が、1年で2・3人多い時には4・5人もいたが、コロナ禍になって、1・2人いや今年はひとりだけであった。特に家庭での子育ては、親子関係が一方的になり、「褒める・認める場面」『叱る・怒る場面』が必ず生じる。子どもは不安の解消に泣く・叫ぶ・暴れる・他人に手が出るなど悩みは尽きない。大声は通報され虐待を疑われる。利用時に「私のいうことは全く聞かない」「弟や妹を泣かす」等、家庭に於ける子どもと二人きりの子育ては息が詰まる様子がうかがえる。そこで、利用時は関わる人を決め、距離感を大事にして、1対1の遊びを満足させる努力をすると、母も子も気持ち气和らぎ笑顔になる。誰を責めるのではない。子どもは、社会が育てるものとボランティアママとの共有事項にした。
- 1歳児の愛着形成後は、母親との直線的関係より、早めに社会に出て人と関わる生活経験を積み重ねることで、社会適応や認知力が育ってくる。(遊びのルール・我慢ややさしさ等)、怒ったところで3歳まで理解できないことを話し、焦らずゆっくりの子育てを推奨する。
- 育ち難さ・気難しさ・言語表出の遅れの子どもが、毎年2・3人いる。特に遊びや生活に支障があると思われる子どもも、周囲の理解と最低限度の社会的ルールさえ守っていれば、遊びたいように遊ばばよいと話すことで母親は安堵、徐々に人間関係が構築され母子ともに安定する。必要であれば年5回の発達心理職の子育て相談や中原・高津区の療育機関や支援事業所の利用を進める。おいでルームとの関わりは、幼稚園児、学童になっても続き、時々『ただいま!』と帰ってくる居場所になっている。より一層居場所なるよう努めたい。
- 人や社会との分断・寸断・孤立・働き方の変化に伴い親子は行き場を失い、その影響は不安や心配が増し子どもより母親が精神的不安を感じた。利用の際にゆったりと遊び過ごせる環境の中で悩みを共有する。



《活動内容》

●実施期間：年間を通して実施（予約制）

●稼働日数：年間を通して123日。

対面で4家族から5家族利用にしたが、事前予約で埋まり利用したい日に予約が取れないという声が聞かれたが、二週間前の昼から予約ができるシステムに理解を求めた。

●実施場所：自宅開放「おいでルーム」1階フロア

●一日の流れ

10:00 オープン

10:00-11:00 室内遊び

11:00-11:30 1・2歳児は近隣の公園やせせらぎに散歩に行く。

この間0歳児はゆったりした中で探索を楽しみ離乳食を食べる。

11:30-13:00 1・2歳児からランチ。その後13時迄室内遊び。

上記、流れが出来ている。次年度は子育て相談は二階フロアを使用し  
て行うなど試みていきたい。

実施内容・実施  
スケジュール



●利用プラン：

\*利用日 毎週月・金曜日を基本とする。都合で曜日変更有  
月2回・水曜日は幼稚園児が居場所で遊べる日

\*利用定員 予約制 4組限定(4~6人兄弟も含む)上限5組

\*利用時間 10時~13時（水曜日は11時~14時）

\*利用料金 一人500円(設備費用及び環境整備を含む)

\*手作りランチ代 大人600円・子ども300円 お弁当持参も可 離  
乳食指導は当面無料

●利用プラン通り。

祝日により曜日変更もあったが、ほぼ計画通り実施できた。

●水曜利用日幼稚園帰りにランチを食べ遊べおやつを囲む日は、年間を通して利用親子共々一息つける居場所になった。利用しながら子どもへの対応など悩みの尽きない子育てに寄り添い母親の安定に努めた。利用の少ない日は1・2歳児が異年齢で遊ぶ機会とした。



●離乳食は個人差を大事にして体重などの発育をみてあわてず、白湯などで慣らし舌の動きで開始した。離乳食初期食(重湯・だし汁)の指導は無料、食べる状況見て有料化(200円から300円)にした。



●2023年1月以降コロナ感染の社会的見通しが発表になるが、引き続き緊張感をもって対応、居場所としては子どもに関わる大人はマスク着用、子どもは日常のスタイルで受け入れ、2023年度にスムーズに移行できるようにした。

《実施内容》

1. ミュージックファシリテーション開催

コロナ禍でイベント形式ではできないが、通常の利用日(月1回・8月を除き)開催。心が和む音遊びや楽器に触れ、手遊び等も取り入れ楽しく遊べる機会を大事にした。

楽器に触れリズム遊びや季節の歌など、また懐かしいメロディーを聞いてママたちの優しい顔と心和む機会になった。



## 2. 居場所作り

年齢別に遊びや生活そして個性を尊重し、心身の発達を促し『楽しかった！』また来たい！という関係性を大切にしたい。

歩けるようになると利用日以外の日にルーム迄歩いて来てしまうほどになる。ある時父親が子どもの後についていくとルームの玄関前であった。それで満足して帰って来ましたと話しを聞き、関係性の大事さを改めて思った。

## 3. 子育て相談

対面で年間 5 回発達心理職が遊びの様子を見て、適切なアドバイスが受けられる。また、必要に応じて個別相談の体制を整える。元利用者が幼稚園児や学童になっても個別相談は受けられる。(個別相談は予約制で 1 時間 3,000 円)心理職の関わりは、1・2 歳児をメインに個々の遊びや生活を見て今大事にすべきアドバイスを適切に利用者に直で話しママは真摯に受け止めその後の育ちに繋げた。また必要に応じて関係機関への紹介も行った。

今年度は幼稚園児学童の親からの個別有料相談はなかったが、事が起きても『慌てない・焦らない・諦めない』でと願うばかり。サポートは更に続く。



#### 4. 食育の推進

- a. アレルギー児も母親に必ず確認してもらい対応する。食品の感覚過敏児についても無理に強要せず、食べられるものを大事にして徐々に食品を増やしていく。無理強いしない・食べる気持ちを尊重する・好きなものがあればそれでいいとする。
- b. おいでルーム始まって2例目であるが、1歳過ぎてもミルクしか受け付けない子どもであったが『のんき・こんき・げんき』でその時期が来るまで母親のフォローに努めている現在である。
- c. 第二子であっても離乳食の悩みは尽きない。泣かれると始終母乳に頼り、気分が低下するママ、そこに第一子もママを必要としてどっちつかずになり、なかなか離乳食が進まない。  
子どもの成長に欠かすことが出来ない離乳食、作り方・与え方・舌の動き・咀嚼力を見て離乳食を家庭と共に進め完了期を迎えたケースもあった。
- d. 食べることは個々を大事に楽しく食べること・食べられるものがあれば良いことを積み重ねた。時間はかかるが一定の改善は必ずあることを信じて今年度取り組んだ結果散歩に行ってもお腹すいたと催促するまでに。また好きな物は自分で器をもって来るまでに育った。  
人気メニューは、ごはん・ひじき・お芋のオレンジ煮カレー等である。



- e. 離乳食については、発育を重視し月齢にこだわらず、食べようとする意欲と舌の動きを見ながらすすめる。準備期から初期食迄の食材と指導料は無料とする。中期食からは300円となる。

f. 要望のある料理教室『時短で作るお惣菜』は人気があった。感染が落ち着けば回数を増やして実施したい。子育てしながらの食事づくりに活用できる手間やコツなどを学べる機会を作りたい。

参加費 1 回 1,000 円

参加者のリクエストに応え、料理の手順とポイントを知らせ、味見しながら舌でおぼえた料理を早速夕食のメニューにしたと情報交換しやる気をアップしていた。今年度初めて料理をしないママが二人いた。それでも何とかしたいと時短惣菜づくりには参加した。



## 5. オンライン活動

SNS 運用において、2021 年 8 月に運用を開始した FaceBook【オンライン子育てサロンおいでルーム】は、2023 年 4 月現在の会員が、利用者・元利用者・おいでルームの支援者を合わせて 64 名(昨年度+22 名)。日常利用の様子・イベント情報、ランチ総菜情報が主な投稿となっている他、イベントのオンライン配信、不用品リサイクルの掲示板が主な利用目的となっている。現利用者の 100 パーセントがサロン利用者でもある事から、メーリングリストでの情報配信は月例のカレンダー内容配信と緊急連絡のみの配信に限定した。

今年度、新たに Instagram【おいでおいでルーム】(2023 年 4 月現在フォロワー 75 名)での情報配信を開始した。一般公開向けに利用内容に関する情報を主に発信する。

次年度、おいでおいでルーム公式アカウント公開に向け、アカウントを取得し、スタッフ間で運用テストを実施。

参加者の年代	未就園児と その保護者	定員 (1回あたり)	5家族 (上限6家族)
実施頻度	週2回(月・金) 月2回水曜日	活動日数 (年間)	123日
スタッフ体制	代表1名 ボランティアママ7名 サポーター2名		
連携する団体・ 連携の手法	<ul style="list-style-type: none"> <li>●コロナ感染の影響で集合して会議をすることが出来ない1年間であったが、オンラインで行われた『中原区の子育て支援活動情報紹介』に参加した。日常が戻れば中原区の子育てネットワーク・ボランティア部会も再開され日はそう遠くないことを願う</li> <li>●今年度もオンラインでの参加となる。次年度は対面での会議など日常が戻ることを期待したい。</li> <li>●コロナ過の中での対面式活動は、どんなに予防してもしきれない現状ではあるが、問題が起きた場合には、適切に対処できるよう、日頃の感染情報収集と発生時の躊躇のない判断力、各区役所との連携プレーで乗り切るほかはない。社会との接点を求める親子が、安心安全に利用できる居場所の提供は、緊張の連続であるが当たり前の日常生活に戻る日を目指していきたい。</li> <li>●子どもを取り巻く問題の解決は、平常になるまで緻密な電話連絡で連携を図るしかない。子どもの安全と母親の喪失感や孤立に注意をはらい、支援が必要と思われた時は、躊躇せずに関係機関と問題解決にあたる。</li> <li>●育ち難さ・気難しさ・言語表出の遅れの子どもが、毎年2・3人いる。特に遊びや生活に支障があると思われる子どもも、周囲の理解と最低限度の社会的ルールさえ守っていれば、遊びたいように遊ばばよいと話すことで母親は安堵、徐々に人間関係が構築され母子ともに安定する。必要ならば年5回の発達心理職の子育て相談や中原・高津区の療育機関や支援事業所の利用を進める。おいでルームとの関わりは、幼稚園児、学童になっても続き、時々『ただいま!』と帰ってくる居場所になっている。</li> </ul>		



取組実施により  
見込まれた効果

- 利用日以外にも、父親が子育て相談のできる場所を探し求め、ホームページを見てやっとの思いで繋がるケースもあった。週末対応も可能な限り行い、子どもの安心安全と母親が元気になる居場所提供は貴重で必要とされている。また、利用者から月に一度土曜日利用の要望が多くあり、2023年度新たな試みとして第3土曜日に実施することになった。なかには父親も参加したいといいですかの問い合わせもあった。試行錯誤しながら時代に合った活動が出来ればと思う。
- 利用者ひとり一人の悩みは、子ども・家族・夫婦・母親の育った環境など様々であった。話せる関係になるまで寄り添い時間をかけた。ほっこりする味のランチが心をなごませ精神的安定につながった。その関係は幼稚園や保育園更に学童になっても続く。3月の卒園式の後無事卒園卒業しましたと来ては喜びを分かち合った。
- 今年度は、ロコミで会員の入会が一昨年5人から14人に増え、子どもが仲立ちとなり、支え合う関係性になった。
- 子どもの成長に追いついていない大人の現状があり、子どもより親対応が必要であった。事を決められない親・ママにはなりたいが、親にはなりたくなかった・自分で考え行動がなかなかできないが仲間と一緒に行動が出来る。13時迄ルームで過ごし午後は違う支援センターなどで夕方まで時間を過ごし帰宅、大人優先の子育てになっている。現状を受け止めルーム利用の時は出来るだけ遊びを尊重、様子を見ていろんな大人が関わり遊ぶことを共有した。その結果、半年もすると人と関わることを子ども自身から求め表情が和らぐ。ランチも短い時間であるが一緒に座ることが出来るようになり、走り回ることも自分からストップをかけ並行遊びを楽しむまでに成長した。一人の成長を通して多くの利用者が見て感じて喜び励みにしていることが何より居場所の力にもなった。
- 1歳児  
今年度は、親に子どもの言いなりになっている場面が目立つ。その対処に困り果てどうすればよいかと問われた。個人差を大事に遊ぶ中で、仲立ちしながら「やってみて・させてみて・身に付けていく」ことを居場所の共通語として掲げ、簡単なルールがあることを子どもは覚えトラブル回避につながった。食育に関して3月末には一人で食べるまでに成長

した。みんなで楽しんで美味しく食べ好きな物をお替りする姿は、何より親の安心と自信につながり、その後の育ちに良い影響となった。

●2歳児

1歳児の積み重ねがあり、ひとり一人が落ち着きその姿を1歳児は目標に出来た。これが異年齢で遊ぶ利点でもある。

●年度末に「利用者様アンケート」を行った

- a. 満足度⇒「とても満足」
- b. 利用時間⇒「3時間がちょうどよい」
- c. 関係者の対応⇒「大変満足」
- d. 代表との話⇒「できている」
- e. 居場所提供(実家的)について⇒
  - 「今のままで十分」
  - 「実家のような利用しやすい」
  - 「相談もできる」
  - 「いつでも何人でも利用できたらなおいい」
  - 「どんな時もあたたかく迎えてくれる」
  - 「ルームの存在に何度も救われた
  - 「幼稚園や保育園入園まで楽しく遊びみんなで食べるランチは生活の積み重ねが出来て子どもの育ちにつながった」

\*ルーム（居場所）の存在意義を感じたアンケート結果だった。  
引き続き、地域の居場所として補助金を有効活用し子育て活動を支援していきたい。